

# 中国語における「多+形容詞」と「有+多+形容詞」

李 菲

## 要旨

「どのくらい〜だ」を意味する中国語の「多+形容詞」は、単独で述語になる以外、動詞「有」を述語に立てた「有+多+形容詞」の文を作ることができる。本稿は、「有」のない「多+形容詞」文と「有+多+形容詞」文について、両者の統語と意味上の差異や使い分けについて考察を行った。「有」のない「多+形容詞」文が成立するのは、「多+形容詞」自体がイディオム化し、「多大」「多高」のように専ら「年齢」「身長」を聞くための表現として用いられるときである。一方、形容詞が表す状態の程度が通常より「高い」ことがわかっていて、その上で「程度の高さ」を尋ねる場合には、動詞「有」を述語に立てた「有+多+形容詞」の文しか用いることができず、「有」のない「多+形容詞」文が成立しにくい。従来の文法記述は、「有」のない「多+形容詞」を基本的な用法と考え、「有+多+形容詞」の文に対して、「有」が入ることがある」と記してきたが、「多+形容詞」のイディオム化に関係なく成り立つ「有+多+形容詞」の文は制限が少ないという点で、基本的用法と考えるべきである。

キーワード：有 形容詞 イディオム how

## 1. 問題提起

中国語では身長、年齢を尋ねるとき、次のように、「多+形容詞」の表現を用いる。

- (1) 你 多 高?  
あなた どのくらい 高い  
「あなたは身長が何センチですか。」
- (2) 你 多 大?  
あなた どのくらい 年上  
「あなたはいくつですか。」

「多高」、「多大」は直訳すると、「どのくらい高い」「どのくらい年上」という意味であるが、日本語でいうところの「身長は?」「いくつ?」と同じ意味である。「多高」、「多大」は、意味と構造の面で英語の how tall、how old と似ている。すなわち、両方とも「身長」「年齢」を尋ねるのに、「身長は?」「いくつ?」のように名詞表現を使わずに、「どのくらい+形容詞」の構造をした表現を用いる点で共通している<sup>1</sup>。一方、両者には大きな違いもある。英語の how tall、how old は be 動詞を伴うのに対し、中国語の「多高」「多大」は (1) (2) のようにそのまま述語となるか、または以下のように動詞の「有(ある)」を伴うことができる。

- (1') 你 有 多 高?  
あなた ある どのくらい 高い  
「あなたは身長が何センチですか。」

1 日本語には、「年齢が上である」ことを意味する英語の old や中国語の「大」のような形容詞がない。「年齢」を尋ねるのに、日本語では「どのくらい+形容詞」のように聞くことができず、専ら「年齢は?」「いくつ」「何歳」などの名詞表現を用いて表現する。

- (2') 你 有 多 大?  
あなた ある どのくらい 年上  
「あなたはいくつですか。」

(1) と (1')、(2) と (2') の違いは「有」の有無だけで、同じ意味を表す表現としてとらえることができる。どちらも「身長、年齢」を尋ねることができる。つまり、「有」はあってもなくてもいい、オプションなものということができる。身長、年齢以外に、距離、物の大きさや寸法を尋ねる場合でも、動詞の「有」がオプションである。

- (3) 这条铁路 有 多 长? (吕叔湘 (1996))  
この鉄道 ある どのくらい 長い  
「この鉄道はどのくらい長いですか。」

- (3') 这条铁路 多长<sup>2</sup>?

- (4) 你家的电视机 有 多 大?  
あなたの家 の テレビ ある どのくらい 大きい  
「あなたの家のテレビはどのくらい大きいですか。」

- (4') 你家的电视机 多大?

- (5) 那个柜子 有 多 高?  
あの棚 ある どのくらい 高い  
「あの棚はどのくらい高いですか。」

- (5') 那个柜子 多高?

一方、上の例に対し、「有」が必須の場合もある。次の例が示すように、難易度や影響の大きさを尋ねる場合には、「有+多+形容詞」しか用いることができず、「多+形容詞」の文にすると表現自体の許容度が落ちる。

- (6) 汉语 有 多 难?  
中国語 ある どのくらい 難しい  
「中国語はどのくらい難しいですか。」

- (6') <sup>?</sup>汉语 多难?

- (7) 影响 有 多 大? (CCL)  
影響 ある どのくらい 大きい  
「影響はどのくらい大きいですか。」

- (7') <sup>?</sup>影响 多大?

---

2 (3') は吕叔湘 (1980) の記述に基づく筆者の作例である。なお、本稿の例文で、出典が示されていないものはすべて筆者の作例となる。

呂叔湘（1980）は、「多+形容詞」の文では「有」が出現しやすい」という指摘をしている。しかし、上の2組の例文では、動詞の「有」が必須であるので、この指摘に問題があることがわかる。「多+形容詞」の文では「有」が出現しやすいならば、「多+形容詞」のみが成立し、「有+多+形容詞」が成立しない例もなくはないが、そうした例が现阶段ではあまりみられない。一方、(6)と(6')、(7)と(7')は「有+多+形容詞」のみが適格な文となることを示すものなので、この点から、むしろ「有+多+形容詞」の文では、「有」がなくてもいい場合がある」という事実がみえてくる。

また、動詞の「有」の有無という観点とは別に、構文の観点から、「有+多+形容詞」と「多+形容詞」の用法について比較し、その差異について考察する必要がある。上の一連の例文から、両者は部分的に使用場面（用法）が重なるものの、完全に同じように使えるわけではないことがみてとれる。ならば、どの場面では両方を同じように使うことができ、またどのような場面になると片方の構文しか用いることができないのかについて、もっと詳細な記述を行う必要がある。本稿ではこうした一連の問題をめぐって、用例を通して考察と記述を行う。

## 2 「多+形容詞」疑問文

### 2.1 イディオムとしての「多+形容詞」

「多+形容詞」は直訳すると、「どのくらい～ですか」という意味であり、生産性の高い表現である。一方、実際の言語運用の場面では、大きさ、長さ、高さ、距離、重さなどを尋ねるための定型フレーズとなっているものが多く、文というよりフレーズの印象が強い。

- (1) 你多高?  
「あなたは身長が何センチですか。」
- (2) 你多大?  
「あなたはいくつですか。」
- (4') 你家的电视机多大?  
「あなたの家のテレビは何インチですか。」
- (8) 离 这儿 多 远?  
から ここ どのくらい 遠い  
「ここからどのくらい離れていますか。」
- (9) 你 的 行李 多 重?  
あなた の 荷物 どのくらい 重い  
「あなたの荷物は何キロですか。」

身長・高さは「多高」、年齢とサイズは「多大」、距離は「多远」、重さは「多重」というように、これらの「多+形容詞」の表現はほとんど一語化している。一語化しているということは、構文を構成している構成素自体の存在が感じられなくなり、構文の分析性と合成性が低くなることを意味する。それは同時に、構文のイディオム化を意味する<sup>3</sup>。イディオムの特徴は、構成素どうしの意味が「1 + 1 = 2」にならない点に

3 本稿でいう構文とは、「形式と意味の慣習的な結びつき」（斎藤・田口・西村（2015））を指す。よって、文レベルのものだけでなく、慣習的に結びついている短いフレーズやイディオムも構文となる。そして、構文は必ず、非合成的で、各構成素に還元できない「構文的な意味」を含んでいる。

ある。これが非合成的、非分析的な意味といわれている<sup>4</sup>。一語化した「多高」「多大」にもイディオム的な意味がみられる。たとえば、「多高」の直訳は「どのくらい高い」であるが、身長が高くない人にも「多高」で身長を聞くしかない。同様に、大きさを尋ねる「多大」は直訳すると、「どのくらい大きい」であるが、物の大きさに関係なく使うことができる。直訳とはいわば、構成素の意味を一つずつ足すことで合成的に全体の意味をとらえようとするのである。以上の「多+形容詞」はいずれも、直訳が効かないイディオム的な意味をもっている。

「多高」などが本来の直訳的な意味を失っていることは、それを用いた質問への返答の仕方からもみてとれる。「多高」は直訳すると、「どのくらい高い」という意味で、これは「(何か)高い」ということを前提とした上で、その高さの程度を尋ねる表現である。つまり、本来は単に身長を聞く質問ではなく、高さを示すような返答を要するものである。しかし、「多高」の答えにはこのような縛りが無い。高いか否かに関係なく、単に身長を答えるだけで会話が成り立つ。

仮に「どのくらい高い」という文字通りの質問に対しては、「高い」という前提を根底から否定する返答も考えられ、「全然高くないんだ」と答えることができる。しかし、このように答えてしまうと、「質問と答えがかみ合わない」チグハグな会話を作ってしまう。

(10) a 他多高?

「彼は身長が何センチですか。」

b<sup>?</sup> 他一点儿也不高<sup>5</sup>。

「彼は少しも背が高くない。」

(10) b の不成立から、(10) a がもはや「どのくらい高い」という文字通りの意味をもっていないことがわかる。よって、(10) a における「多高」は単に身長、高さを聞くためのイディオムであって、高さの程度を聞くという意味機能はもう失われているといえる。これと同じことが、大きさや年齢を聞く「多大」、重さを聞く「多重」にも起きている。文字通りの「大きさ・重さの程度」を聞くという意味機能が失われているため、大きさや重さに関係なく数値だけを答えることが許され、逆に「大きくないんだ、重くはないんだ」とわざわざ否定する返答は変になる。

(11) a 你多重?

「あなたは何キロですか。」

b<sup>?</sup> 我不重。

「私は重くないです。」

「多高」「多大」がイディオム化したことは、統語上の特徴からもみてとれる。これらは単独で述語になれる以外、次のように動詞の目的語成分になることができ、名詞と同じふるまいをしている。

- (12) 长        了        多        高  
      伸びる    ASP<sup>6</sup>    どのくらい    高い

4 認知言語学ではイディオムの例としてよく、英語の kick the bucket が取り上げられる。直訳すると「バケツを蹴る」だが、実際は「死ぬ、くたばる」を意味する。よって、構成素の意味を足しても全体の意味にたどりつけないのがイディオムとしての重要な特徴となる。こうしたイディオムは、どの言語にも数えきれないくらい大量に存在する。たとえば、日本語の「割りを食う」という表現。筆者がかつて村上春樹の「わりをくう男」というエッセイを読んだとき、「わりをくう」という日本語が最後まで理解できなかった。「わり」は、「割合」「割引」などで「パーセンテージ」的な意味として理解していたが、「割りを食う」の意味には全く「歯が立たなかった」。

5 本稿では、考察対象である「多+形容詞」「有+多+形容詞」の例文にはグロス(逐語訳)を付しているが、それ以外の例文は、紙幅の関係でグロスを省略した。

6 ASP は、アスペクトマーカを指す。

「どのくらい伸びた」

- (13) 活 到 多 大 (CCL)  
 生きる まで どのくらい 年上  
 「何歳まで生きた」

(12) のアスペクト「了」や、(13) の結果補語「到」の直後は目的語となる名詞句が現れる場所である。(12) (13) のような用例は、「多高」「多大」が名詞となったことを意味する。これは、日本語の数量を聞く疑問詞「どのくらい」「いくつ」「いくら」が名詞としてふるまうのと同じである。

こうした「多+形容詞」フレーズの中で、もう一つ、数量を聞く「多少(どのくらい)」についても少し言及する必要がある。「多少」は他のフレーズと違って、単独では述語になるより、動詞の直後で目的語になることが多い。

- (14) a 你 有 多少?  
 あなた ある どのくらい  
 「あなたはどのくらいありますか」  
 b? 你 多少?

- (15) 你 买 了 多少?  
 あなた 買う ASP どのくらい  
 「あなたはどのくらい買いましたか」

「有」のない(14) b は文法的に正しい文とはいえない。これは「多少」が「多高」「多大」と最も異なる点である。どちらもイディオム化しているものの、本稿では「多少」を通常の「多+形容詞」フレーズと区別して考える<sup>7</sup>。

## 2.2 イディオム化していない「多+形容詞」

以上は、イディオム化した「多+形容詞」の意味、統語上の特徴についての考察である。では、イディオム化する前の、程度の高さを問う、「どのくらい～だ」を意味する「多+形容詞」の用法はどうだろうか。1章で取り上げた(6)と(6')のペアを思い出されたい。「中国語が難しいことがすでにわかっている、その上で、どのくらい難しいのか」を表すのは「有+多+形容詞」の文である((6))。「多+形容詞」を用いた(6')は自然な表現ではない。

- (6) 汉语有多难?  
 (中国語はどのくらい難しいですか。)

- (6') ?汉语多难?

つまり、イディオム化していない「多+形容詞」は単独で述語になれない。この問題は、従来の研究においてあまり指摘されていない。「多+形容詞」は文字通りに訳すと、「どのくらい～だ」を表し、形容詞が表

7 「多少」は「多+形容詞」がイディオム化したものではない可能性がある。中国語には「高低(高さ)」「大小(大きさ)」といった、反義語の関係にある形容詞を並べて「程度」という意味の名詞を作り出す語形成法がある。よって、「多少」は「多+形容詞」ではなく、「多+少」の構造をもつとも考えられる。語の形成、構造がはっきりしない以上、さしあたり「多少」を考察対象から外す。

す状態の高さを聞く表現としてとらえられている。しかし、(6) と (6') のペアで示したように、「難しさの程度」を問うことができるのは「多+形容詞」ではなく、「有+多+形容詞」の方である。この場合、動詞「有」を述語としなければいけない。これは、イディオム化した「多高」「多大」が単独で述語になれるのと大きく異なる。このことについて、もう少し例文を通して検証したい。ここで、(7) と (7') のペアをもう一度みてみよう。

(7) 影响有多大? (CCL)  
「影響はどのくらい大きいですか。」

(7') ?影响多大?

(7) は、ある事態の影響がいかに深刻なものかを聞く場面での文である。「深刻な影響があった」ということがその前の文脈ですでに語られていて、それをふまえ、「いかに深刻なのか、どれだけ深刻なのか」を聞いている。このような場面では、(7') のように表現することができない。「多大」が単独で述語になるときは常にイディオムとして、「年齢は?」や「サイズは?」を意味する。本来の、「どのくらい大きい」という意味を表す場合、(7) のように動詞「有」を伴わなければならない。ここからも、「多+形容詞」は単独では、程度の高さを聞く表現として自立できない(述語になれない) ことがわかる。

ここで、「多+形容詞」と英語の「how +形容詞」を比較してみたい。両者は意味、構造の面で類似しているため、比較しやすく、その分違いもみえやすい。「多+形容詞」と同様、「how +形容詞」の構造をもつ表現の中に、how much、how many、how old といったイディオム化したものが存在する。大雑把に言えば、how much は「いくら」、how many は「どのくらいや頻度」、how old は「いくつ」を意味する疑問詞である。一方、これら以外に、how は様々な形容詞と結びつくことができ、その形容詞が表す程度の高さを聞くことができる。よって、「how +形容詞」の形をもつ表現の中に、イディオム化したものとその都度生産的に作られているものが混在しているといえる。前者は、イディオム的な意味をもつ。後者は、その都度組み立てられた一回限りの表現として、文字通りの「程度の高さ」を聞くという意味機能をもつ。混在しているものの、両者の意味の違いがみられる。次の(16) はイディオム how old の例である。(17) の C1 は、その都度組み立てられた一回限りの表現である。

(16) **How old** are you ?  
(あなたはいくつですか。)

(17)

A1 There is an **angry** husband in your living room.  
(怒った夫がリビングにいるぞ)

C1 **How angry?**  
(どのくらい激怒している?)

A2 .....

C2 Is he packing ?  
(何かを所持している?)

A3 What ?  
(どういうこと?)

C3 Does he have a weapon ?  
(武器を持っているのか?)

A4 He has a stick.  
(杖を持っているぞ)

(Two and a Half Men, Season 2, Episode 24)



(17)における how angry (CI) の部分に注目されたい。how angry はイディオム化していない、「how +形容詞」の表現である。意味は文字通りの、「どのくらい怒っている」である。この場合、(17) の A1 で、「angry husband」が待っていることが告げられているので、「怒っている」ということがすでにわかっていて、その上で、CI が「じゃ、どのくらい怒っているのか」という怒りの程度を確認している<sup>8</sup>。(17) の how angry を中国語に訳そうとするとやはり、「有+多+形容詞」の形を使わざるをえず、「有」のない「多+形容詞」の表現を用いることができない。

- (18) a 他 有 多 生气?  
 彼 ある どのくらい 怒っている  
 「彼はどのくらい怒っていますか。」  
 b<sup>?</sup> 他 多 生气?

ここで、「how +形容詞」と「多+形容詞」の違いがようやく浮き彫りになった。両者は、どちらもイディオム化したものとそうでないものを含んでいるが、「how +形容詞」の場合、統語上の変化が起きていない。一方、「多+形容詞」は述語になることができるのはイディオム化した表現のみで、本来の「程度の高さ」を問うという用法になると、動詞「有」を述語に立てる必要がある。こうした違いは、以下の対訳を比較するとより鮮明になる。

【イディオム】

- (19) **How old are you ?**  
 你 多大?

【非イディオム】

- (20) **How angry is he ?**  
 他 有 多 生气?

この比較から、「多+形容詞」は単独で述語になれるのは、(19) のようなイディオム化した表現に限られることがわかる。「程度の高さ」を尋ねる場合、「有+多+形容詞」を用いなければならない。「how +形容詞」との比較が、「多+形容詞」の思わぬ特徴を発見できた。(6') の「<sup>?</sup>汉语多难?」や(7') の「<sup>?</sup>影响多大?」が成立しにくい理由もここにある。難しさの程度、深刻さの程度を表す「多难」「多大」はイディオム化しておらず、ゆえに動詞の「有」を述語に立てる必要があり、「有+多+形容詞」の文を用いなければ表現できない。

### 3 構文からみる「多+形容詞」と「有+多+形容詞」

2節で明らかになった「多+形容詞」の特徴は、構文の観点からとらえ直すことができる。構文の観点に立つということは、構文全体の意味、統語的特徴をすべてそれぞれの構成素に還元しようとせずに、丸ごととらえることである。このようにみた場合、「多+形容詞」と「有+多+形容詞」との関係は、単に動詞の「有」の有無にとどまらず、二つの、別個の構文であるという見方ができる。単独で述語になることができる「多+形容詞」は①、「有+多+形容詞」は②のように示すことができる。

8 (17) はアメリカのテレビドラマ (シットコムシリーズ) 『Two and a Half Men』(邦題:『チャーリー・シーンのハーバースター★ボーイズ』) の台詞である。この会話は、主人公のチャーリー (C) が2階の自室で人妻との情事に勤んでいるところへ、1階にいたチャーリーの弟アラン (A) が急に上がってきて、その人妻の夫が今家に来ているので、急いで1階に降りよう忠告している場面である。「angry husband」とは、「妻の情事を見つけたことで、カンカンになっている夫」を指し、それに対しチャーリーが「どのくらいカンカンなんだ」と怒りの度合いを確かめようとしている。

① 「名詞 + 多+形容詞？」

ex 你 多大?  
他 多高?

② 「名詞 + 有 +多+形容詞？」:

ex 汉语 有 多 难?  
他 有 多 生气?

①では、イディオム化した「多+形容詞」が述語となって、年齢、身長を尋ねる文を作る。こうした質問に対して、具体的な数値を一つ挙げれば答えとなる。中国語では、年齢や身長といった具体的な数値はそのまま述語になることができる。

(21) a 你 多大?

「あなたはいくつですか。」

b 我 38 岁。

「私は 38 歳です。」

(22) a 你 多高?

「あなたは身長が何センチですか。」

b 我 一米七。

「私は 170 メートルです。」

(21) b、(22) b のような「名詞+名詞」の文は、「名詞述語文」と呼ばれている。(21) a、(22) a は、「名詞述語文」と構造が同じである。これに加え、イディオム化した「多大」「多高」は、目的語の位置に現れることができるため((13)と(12))、名詞としてとらえることができる。この2点から、「多+形容詞」が作る①の構文は、その答えと同様、名詞述語文の一種といえることができる。

①に対し、②では動詞の「有」が述語となっており、「有」の文の一種といえる。そして、「多难」「多 生气」は「多大」「多高」のようにイディオム化していないため、直ちに目的語または名詞句と断定することができない。また、「有」の文は通常、存在や所有を表すが、②の構文では動詞「有」の意味を具体的に示すことが難しく、文法化した用法であるといえる<sup>9</sup>。よって、名詞述語文である①の構文に比べて、②の構文は統語的な面で少し特異である。

形容詞が表す状態の程度がいかに高いかを問う②の構文は、実は意味の面でも少し特異である。というのは、②の問いに対し、具体的で明確な答えを提示することが①の問いほど簡単ではない。日本語でも、「いくつ?」「身長は?」と聞かれれば、瞬時に年齢と身長を答えることができるが、「中国語はどのくらい難しいですか」「彼はどのくらい怒っているのか」というような問いに対しては、「そうね、どのくらいだろう…」と、一瞬立ち止まって考えてから答えを出す人が多いと思う。このことは、(17)の会話にも表れている。弟のアランが兄のチャーリーに、「その怒った夫が一体どのくらい怒っているのか (how angry)」と聞かれ、一瞬「……」(A2)とことばに詰まっていた。アランが答えに困っていることを見抜いたチャーリーは続けて、「何かを持っているのか」と武器の有無を確認しようとしたが、それでもアランが「What?」(A3)と質問の意図を汲み取ることができなかった。激怒している人がいて、その怒りがいかにすごいものかを描写するのは、簡単なことではないことがみてとれる場面である。

また、②の問いに対する返答は、必ずしも一つではないという点においても①の場合と異なる。①の問いは(21) b、(22) bのように数値で答えるのが一般的である。一方、②の問いは程度の高さを尋ねている

9 『現代汉语词典』(第6版)では、数量や形容詞を伴う動詞の「有」の意味を、「表示达到一定的数量或某种程度(一定的数量または程度まで達した)」としている。



ので、具体的な数値を挙げたり、数値化できない場合は実際の状況や様子を伝えたり、あるいは他の物に例えたり、比較を行うなどの手法によって伝える。

- (23) a 汉语有多难?  
「中国語はどのくらい難しいですか。」  
b 比英语难学。  
「英語より難しいです。」
- (24) a 他有多生气?  
「彼はどのくらい怒っていますか。」  
b 他的脸都气红了。  
「顔が怒りで真っ赤になっている。」

(23) b では、中国語を英語と比較して、難易度のレベルを伝えている。(24) b では、顔が真っ赤になったという様子にふれることで、怒りの激しさを伝えている。難易度、怒りはどちらも数値化できないものなので、(21) b、(22) b のように答えられず、その分色々な答えが考えうる。

#### 4 構文①と②の関係性

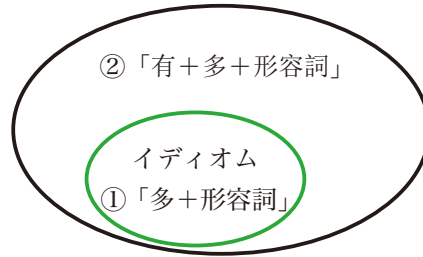
「有+多+形容詞」の構文②は、構文①と、構造の面だけでなく、意味機能及び答え方において顕著な違いがあることが以上で明らかになった。次は、1 節の問題提起で取り上げた次の四つのペアについて考えてみたい。こうしたペアを通して、構文①と構文②の関係性、及びその意味の差異をとらえてみたい。

- (1') 你有多高?  
(1) 你多高?
- (2') 你有多大?  
(2) 你多大?
- (4) 你家的电视机有多大?  
(4') 你家的电视机多大?
- (5) 那个柜子有多高?  
(5') 那个柜子多高?

(1')、(2')、(4)、(5) は②の構文であるが、「多高」は身長や高さ、「多大」は年齢、大きさを表すイディオムである点で、難易度や怒りの激しさを問う他の例と異なる。こうした例からは、構文②にはイディオム化した「多+形容詞」が現れる場合があることがわかる。イディオム化していない「多+形容詞」は②、イディオム化した「多+形容詞」は①と②の両方に現れるということは、①と②は相互排他的な関係ではなく、むしろ包含関係にあるといえる。つまり、②の中に、一部イディオム化した「多+形容詞」だけが動詞「有」を落とした①の構文を作ることができる。

従来の文法記述では、「多+形容詞」文に動詞「有」が現れることもあるとしているが、実際はむしろその逆で、「有+多+形容詞」の一部が動詞「有」を落とすことができる。形容詞の観点からみた場合、構文②は構文①よりも制限が少なく、生産性が高い。そして、「多+形容詞」がイディオム化している場合、構文①と構文②の両方が可能となるので、(1') と (1)、(2') と (2)、(4) と (4')、(5) と (5') のよ

図1 ②と①の関係



うなペアができる。

次は、こうしたペアの意味について考えてみたい。①と②は形、意味の面でそれぞれ異なる特徴を示していることはすでに明らかになった。こうした違いは、上の四つのペアにおける意味の差をとらえる上でヒントとなる。まず、答え方からそれぞれのペアにおける両構文を区別できる。つまり、構文①の(1)、(2)、(4')、(5')は通常は数値で答えるのに対し、構文②の形をした(1')、(2')、(4)、(5)は、具体的な数値に加え、それ以外の答え方もできる。

- (1') 你有多高?  
 a 我一米七。(170センチです。)  
 b 我在我们班最高。(クラスで一番高いです。)
- (2') 你有多大?  
 a 我20岁。(二十歳です。)  
 b 我比你还大两岁。(あなたよりさらに二歳年上です)
- (4) 你家的电视机有多大?  
 a 60英寸。(60インチです)  
 b 就是一个小影院。(まるでミニシアターのようだ)
- (5) 那个柜子有多高?  
 a 1米8。(180センチです。)  
 b 能碰到房顶。(天井に届くほど。)

各質問に対して、bの答え方が可能ということは、(1')、(2')、(4)、(5)はイディオム化した「多高」「多大」からなっているものの、動詞「有」及び構文全体の力によって、本来の「程度の高さ」を聞くという意味機能を取り戻しているということができる。「クラスで一番高い」「まるでミニシアター」という答えは、「程度の高さ」を表現したものである。例えば、身長が高いことがすでにわかっている、「じゃ、どのくらい高いのか」という質問に対して、「クラスで一番高い」が最も自然な答えとなる。あるいは、家のテレビが大きいことはすでに知っていて、「どのくらい大きいのか」に対して、「まるでミニシアター」という答えからは「大きさ」が伝わる。

このように考えると、(1')、(2')、(4)、(5)は実は多義的(ambiguous)な表現であるという見方もできる。つまり、「多高」「多大」をイディオムとして解釈する場合、aのように数値で答える。一方、本来の「どのくらい高いのか」「どのくらい大きいのか」という「程度の高さ」を聞く文として理解すると、bの答え方が可能となる。イディオムとしてとらえるかどうかは、文脈に左右されるほか、個人の理解によっても異なりうる。これに対し、構文①の(1)、(2)、(4')、(5')は専ら「身長」「年齢」「サイズ」「高さ」を尋ねる質問で、程度の高さを聞くという意味が含まれていない。よって、(4')の質問に対し、「まるでミニシアター」は自然な答え方とはいえ、唐突な感じを与える。

- (4) 你家的电视机多大?  
 (あなたの家のテレビは何インチですか。)  
 —<sup>2</sup> 就是一个小影院。(まるでミニシアターのようだ)

以上から、①と②の構文が重なり合うような場合でも、意味の差がみられることがわかる。イディオム化した「多+形容詞」は①と②の両方の形をとることができるものの、意味が異なる以上、①と②を異なる構文として区別する必要がある。また、両者は包含関係にあり、構文①を構文②から派生した用法とみることができる。構文②が動詞「有」の文であるのに対し、構文①は名詞述語文の一種である。

## 5 今後の課題—「有」の文法化

以上、「多+形容詞」と「有+多+形容詞」の成立条件、意味機能などについて考察を行ってきた。名詞述語文である①の文は、②の下位構文として位置づけることができ、「多+形容詞」がイディオム化した場合のみ成り立つ。一方、②の「有+多+形容詞」の文は、イディオム化していない「多+形容詞」がプロトタイプであり、「程度の高さ」を聞く表現として用いられる。

最後に、中国語の「有+多+形容詞」構文を英語の「how +形容詞」と比較し、動詞「有」の文法化の問題について少しふれておきたい。英語の「how +形容詞」はイディオム化に関係なく、be 動詞を伴う。

[how +形容詞+ be 動詞+名詞]

一方、中国語は「存在」「所有」を表す動詞「有」を用いる。また、「多+形容詞」のイディオム化で新たな構文が生じている点でも、英語と異なる。

② [主語+有+多+形容詞]  
 ↓ イディオム化  
 [主語+多+形容詞]

英語は年齢と身長を尋ねたり、また程度の高さについて質問するとき、一つの構文によって表現できる。この構文において、be 動詞は「how +形容詞」の意味内容を発話の現在にグラウンディング (grounding) するという役割をもっている<sup>10</sup>。これは、「存在」や「所有」といった具体的な概念を超越した意味的、文法的機能である。そして、英語は中国語のように下位構文が生じていないのは、be 動詞の文法化と関係していると思われる。これに対し、対応する中国語の構文②における動詞「有」は、be 動詞のように、グラウンディング機能をもつほど文法化しているのだろうか。従来の研究では、②の「有」を「(程度に) 達する」と解釈しているが、これもグラウンディング機能の一種と考えてよいか。また、「存在」「所有」「到達」という三つの概念がどのように関係しあっているのか。今後は、グラウンディング機能、文法化の観点から、「有+多+形容詞」における動詞「有」の働きについて引き続き考察していきたい。

### <参考文献>

- 吕叔湘 (主编) 1980. 『现代汉语八百词』。北京: 商务印书馆。  
 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹 (編著) 2015. 『明解言語学辞典』。東京: 三省堂。  
 Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

10 be 動詞のグラウンディングについては、Langacker (2008) を参照。